

研究ノート

沖縄県北部地域で地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が語る死生観 — 1事例の語りを通して —

溝口 広紀*, 大城 凌子*

A study of view of life and death by aged men living alone who doing not participate in community activities in the northern part of Okinawa —Narrative of aged—

Hiroki MIZOGUCHI*, Ryoko OSHIRO*

要 旨

本研究の目的は、地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者のA氏の語りから、死生観を明らかにすることである。地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者1名に半構造化面接調査を実施し、質的統合法を用いて分析した。結果、【思うように動けないもどかしさ：身体機能の低下に伴う困難感や不安】、【低い自己肯定感：他者との関係を築けなかった背景】、【寂しさが紛れる拠り所：細やかな楽しみと気にかけてくれる人の存在】、【厭世的な思い：満たされない生活への愁い】、【誰かと繋がりたい思い：話し相手がないことへの孤独感】、【思いを伝えて逝きたい：安心して最期を迎える準備】の6つのシンボルマークが抽出された。地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者A氏の死生観は、現在の満たされない生活への愁いと、話し相手がないことへの孤独感の中で、【厭世的な思い】と、【つながりたい思い】の間で逡巡しながらも、誰かに【思いを伝えて逝きたい】として語られた。地域活動に参加していない一人暮らし高齢者が安心して最期を迎える準備として、伝えたい思いを語れる場や、聴く人の存在とつながりを支援することの重要性が示唆された。

キーワード：一人暮らし、男性高齢者、死生観、地域活動に参加していない

Abstract

Purpose: This study attempts to clarify a views of life and death by aged men living alone who doing not participate in community activities in the northern part of Okinawa.

Methods: Semi-structured interviews were held with aged men who live alone and do not participate in community activities in northern part of Okinawa. They were asked about their views on deaths and results were analyzed using an integrated qualitative method.

Results and Considerations: While the views of A, an elderly male living alone without joining regional activities, on life and death waver between 【Pessimistic thoughts】 about current life and the 【Wanting to connect with someone】 about life moving forward, it was clear that there were 【Want to tell him and then I want to go】 with an awareness of his own end.

In order to prepare for the end of life with peace of mind for elderly people living alone who do not participate in community activities, it was suggested that it is important to support where

* 名桜大学人間健康学部看護学科 〒905-8585 沖縄県名護市字為又1220-1 Department of Nursing, Fundamentals of Nursing, MEIO University, 1220-1 Biimata, Nago City, Okinawa Japan

they can talk about their thoughts and feelings and connections with others to whom they can listen to your thoughts of their own end of life.

Keywords: living alone, elderly men, view of life and death, doing not participate in community activities

I. はじめに

高齢化の進展に伴い、一人暮らしの高齢者も増加している（内閣府, 2019）。一人暮らし高齢者の特徴として、孤独感や孤独死への不安を抱える人が多い（溝口, 大城, 2019）が、孤独死や孤立死の実態に関する全国的な調査はほとんど見当たらない。2011年に、民間調査機関が行った孤立死に関する調査において、東京23区の孤立死者数と全国の人口動態統計データを使用して、全国の65歳以上の孤立死者数の推計値を出した結果、年間で2万6821人に上ることが報告されている（菅原, 2018）。

沖縄県では、琉球大学法医学講座の調査によると、2016年～2018年の3年間で、毎年100人以上の孤立死が発生しており、年齢別では60歳代が最も多い。また、沖縄県北部地域で検案を担当している医師によると、2009年～2019年の間に担当した277件の内10件が孤立死であり、全員男性であったと報告されている（梅田, 2019）。さらに、そのうち9件は、2017年以降に発生していることが指摘されている（山田, 2019）。

今後も一人暮らし高齢者の増加が予測される日本では、高度経済成長時代に都市部で建設された団地等での孤立死が問題となっている（川口, 高尾, 2013; 田中, 森實, 2016）が、都市部に特徴的な現象ではないといえる。また、菅野（2017）は、現在の日本の現実として、何気ない日常を送っている壁一枚向こうでは、様々な縁から絶たれ、孤立死と隣り合わせの生活を送っている人が存在することや、家族がいても外部との接点がなければ孤立死となり得ることから、切れ目のないネットワークでつながりを持つことの必要性を指摘している。このように孤立死対策は喫緊の課題であり、厚生労働省が提示する孤立死防止対策では、地域とのつながりを軸にした取り組みが推奨されている（厚生労働省, 2008）。沖縄県における地域とのつながりに関しては、琉球新報社（2017）による「沖縄県民意識調査報告書」によると、隣近所との付き合いが「とても盛んだ」と答えた人は、離島を含む沖縄県5地域のなかで北部地域が最も多い。地域行事や祭りへ参加する（「よく参加する」、「たまに参加する」を含む）人は、北部地域が69.2%で宮古地域に次いで高い。また、生きがいとしてきたことについては、「ボランティアなど社会に貢献すること」と回答した人は、北部地域が最も多い。一方で、沖縄県における隣近所との

付き合いについて、70代以上で「とても盛んだ」と回答した人が最も多いため、「若年層で『会話程度』から『あいさつ程度』への関係性の希薄化が進んでいる」と報告されている。

内閣府（2021）の調査では、65歳以上の一人暮らし世帯は男性より女性が多い。また、平井、近藤、市田、末盛（2005）によると、外出頻度または友人・別居家族との交流頻度が週1回未満を閉じこもりと定義して行われた調査において、女性は男性よりも閉じこもりが少なく、「年齢が上がっても友人との交流頻度は減りにくい」ことが指摘されている。地域包括ケアシステムが導入され、地域とのつながりが重視される一方で、地域の過疎化や身体的な問題などから地域とのつながりや関係性が希薄になった一人暮らし男性高齢者への介入は困難な状況が推察される。沖縄県北部地域で生活する一人暮らし男性高齢者が、地域とどのように関わり、自身の生と死をどのように考えているのかを語りを通して明らかにすることは、対象者の看取りへのニーズを踏まえたケアの提供につながることから、その人らしさを大切にしたエンドオブライフケアへの一助になる。さらに、孤立死のリスクが高いと推測される地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者の孤立死対策や、死の質（Quality of death）を高めていくまでの示唆が得られるものと考える。

II. 本研究の目的

1. 目的

地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者の語りから、どのように死生観を捉えているかを明らかにする。

2. 用語の操作的定義

1) 死生観

河村ら（2016）の定義を参考に、「一人暮らし男性高齢者自身の最期の迎え方を意識した現在の生活や死に関する個人の思いや考え方、価値観」と定義する。

2) 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者

矢野ら（2008）の文献を参考に、「月に1回程度も、家族の交流以外に地域社会における老人クラブや、集会などの集団活動に自主的に参加していない65歳以上の人暮らし男性高齢者」と定義する。

III. 研究方法

1. 研究対象者

沖縄県北部地域に在住し、地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者で、本研究での半構造化面接調査に同意が得られた者とする。地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者の選定条件は、前述の操作的定義を踏まえて、認知機能に問題が無くコミュニケーションが可能な者とした。

2. 対象者の選定方法

沖縄県北部地域A村の社会福祉協議会の担当者に、研究対象者の条件にあう方の紹介を依頼した。

3. データ収集方法

本研究への参加に同意が得られた研究対象者に対して、インタビューガイドを用いて半構造化面接調査を実施した。面接はプライバシーが守られる個室で行い、面接内容は研究対象者の了承を得て録音した。

1) インタビュー内容

- ① 年齢
- ② 現在の生活について（一人暮らしの期間、通院や公的サービスの利用状況、普段の1日の過ごしかたや、生活での楽しみや生きがい、不安に感じることなどについて）
- ③ 隣近所や友人との交流および地域活動に参加することについて
- ④ これから的人生を、どのように過ごしていくか（自身の生と死に関する考え方について）
- ⑤ 自身の生や死に関して、誰かに話した経験や語ることについて

4. データの分析方法

インタビューで得られたデータは、逐語録に起こし元ラベルを生成し、質的統合法(KJ法)を用いて分析を行った。山浦(2012)によると、質的統合法は「1つの事例の持つ個性・独自性を把握しつつ、事例に内在する論理を抽出・発見する」ことに優れていると述べている。分析は以下の手順で行った。

1) ラベルづくり

逐語録から研究対象者の語りの内容を損なわないよう要約し、元ラベルを作成した。

2) グループ編成

作成した元ラベルを一覧できるように広げ、ラベル間の類似性に沿ってグループ化し、集まったラベルの全体感を一文で表現し表札を作成した。最終ラベルが6～7枚になるまでグループ化と表札作成を繰り返

し行い、最終ラベルにシンボルマークを作成した。グループ編成の一部を図1に示す。その後、6枚の最終ラベルを用いて、ラベル間の関係性に着目して見取り図を作成した。

5. 信憑性と妥当性の確保

分析の信憑性と妥当性を確保するため、研究者は質的統合法の研修を受け、適時指導者からのスーパーバイズを受けながら実施した。また、これまでに質的統合法を用いた研究や指導の経験を有する共同研究者と全分析過程においてディスカッションを行いながら分析を進めた。

6. 倫理的配慮

研究の実施に当たり、研究対象者に文書と口頭で研究の趣旨・方法・研究への協力は自由意思であり、協力を辞退した場合にも不利益を生じないこと、個人情報の保護を徹底すること等について説明し同意を得た。また、本研究は名桜大学研究倫理委員会における承認を得て実施した（承認番号：2019-007-1）。

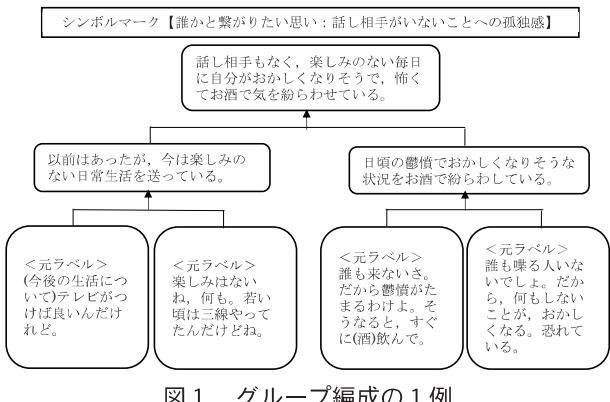


図1. グループ編成の1例

IV. 結果

1. 研究対象者の概要

沖縄県北部地域A村の社会福祉協議会より紹介を受け、研究協力の同意が得られた20年前から一人暮らしを続けている60代のA氏を本研究の対象者とした。A氏は脳梗塞の既往があり、左上下肢に軽度の麻痺があり、要介護2の認定を受け、毎日、1日3食の配食サービスのみを利用していた。また、県内在住の兄弟や2名の息子との関係性が悪く疎遠状態が続いている、家族や親族の支援は得られない状況であった。

2. 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者 A氏が語る死生観の全体像

A氏へのインタビューは2回行い、合計時間は117分であった。分析に用いた元ラベルの総数は61枚であつ

た。本文中におけるシンボルマークは【墨付き鍵カッコ】、最終ラベルは「大カッコ」、元ラベルは「鍵カッコ」を用いて記述した。分析の結果、【思うように動けないもどかしさ：身体機能の低下に伴う困難感や不安】、【低い自己肯定感：他者との関係を築けなかった背景】、【寂しさが紛れる拠り所：細やかな楽しみと気にかけてくれる人の存在】、【厭世的な思い：満たされない生活への愁い】、【誰かと繋がりたい思い：話し相手がいないことへの孤独感】、【思いを伝えて逝きたい：安心して最期を迎える準備】の6つのシンボルマークが抽出された(表1)。抽出されたシンボルマークをもとに作成した見取り図を図2に示す。

地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者A氏は、身体機能の低下に伴う日常生活の困難感や不安から【思うように動けないもどかしさ】や、不器用な人付き合いとこじれた人間関係による【低い自己肯定感】を根底に抱えていた。これらはA氏の人生観に影響し、満たされない生活への愁いから【厭世的な思い】を感じてい

た。その一方で、話し相手がないことへの孤独感から【誰かと繋がりたい思い】を抱いていた。これらの思いは細やかな楽しみと気にかけてくれる人の存在を見出すことで、【寂しさが紛れる拠り所】としてA氏の生活を支えていた。そして、安心して最期を迎るために、誰かに【思いを伝えて逝きたい】という心情を語っていた。

3. 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者A氏が語る死生観の具体的な内容

1) 地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者A氏(以下、A氏)が抱える生活背景

(1) 【思うように動けないもどかしさ：身体機能の低下に伴う困難感や不安】

最終ラベルは、[過去に病気やケガで死にそうになった体験があり、後遺症で今も思うように体が動かず生活の困難感や不安がある]とした。

A氏は、自身の身体について「(脳梗塞になった時)こっちでひっくり返ってよ、頭打ってさ、床に打ってさ。」と語った。

表1. 沖縄県北部地域で地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が語る死生観

シンボルマーク	最終ラベル	代表的な元ラベル
思うように動けないもどかしさ： 身体機能の低下に伴う 困難感や不安	過去に病気やケガで死にそう になった体験があり、後遺症 で今も思うように体が動かず 生活の困難感や不安がある	<ul style="list-style-type: none"> ・(脳梗塞になった時)こっちでひっくり返ってよ、頭打ってさ、床に打ってさ。そのまま気絶しているわけよ。だから(後遺症は)これ(足)よ。これ(口)も動かしにくいよ。 ・あそこ(2~3m離れた台所)に行って帰ってくるわけ。あっちまで行くのも、すごいよ。時間かかるの。 ・これ(シャワーチェア)も危ないよ。こんなふうに、ひっくり返ってさ。だから、誰かおればさ、安心して(シャワー)浴びるけどね。
寂しさが紛れる拠り所： 細やかな楽しみと気に かけてくれる人の存在	一人暮らしになってから、ラジオから流れる民謡や近所で 気にかけてくれる人がいてくれることで助けられている	<ul style="list-style-type: none"> ・このラジオよ、助かった。子守唄みたいな感じでね。何かやってればもう、安心してね、あの演歌とか好きなもんだから、あのー民謡とかね。 ・大家さんの息子さんよ、あれが毎日来るんですよ。雨降るときも来て、あんな台風の前にも来る。「なんでこんなするかー」って言つたら、「あんたが、ここで亡くなったら大変だよ」って。「あんたがここでそのまま、眠ってるのあぶないよ」って。来るんですよ。
厭世的な思い： 満たされない生活への 愁い	眠れないほどの空腹感や、生活していくことの大変さを考えると、もう死んだ方がいいと思ったりする	<ul style="list-style-type: none"> ・腹減ってさ、寝れんわけよ。夜は(配食の量が)少ないもんだから。 ・(今後の生活について)もう大変ね。もう、死んだほうが良いなって思うことあるよ、何回も。食べるものが無いさ。腹が減ってね、寝れないわけよ。
誰かと繋がりたい思い： 話し相手がいないこと への孤独感	話し相手もなく、楽しみのない毎日に自分がおかしくなり そうで、怖くて酒で気を紛らわせている	<ul style="list-style-type: none"> ・誰も喋る人いないでしょ。だから、何もしないことが、おかしくなる。恐れている。 ・誰も来ないさ。だから鬱憤がたまるわけよ。そうなると、すぐに(酒)飲んで。楽しみはないね、何も。若い頃は三線やってたんだけどね。
思いを伝えて逝きたい： 安心して最期を迎える 準備	信頼できる相手になら自分の 今後について話して逝きたい と思っている。そうすれば胸 のつかえがとれて安心できる	<ul style="list-style-type: none"> ・(自身の生や死について、今回語ったことについて)なんかスッキリしてね。安心してる。つかえてたのが、みんな出たような感じがしてさ、話してるだけでもね、最高にいいですよ。 ・(不安に感じることは)一人で、そのまま逝くんじゃないかと思ってよ。何か眠ってて、そのまま逝くでしょ。(逝くって)言ってくれればいいけど。 ・そのまま寝るんだったら、誰か一言いって行きたい。何か言えればいいけど。 ・その話(もし倒れたら、どうしようという話も含めて、生活する中で心配なこと、不安なことについて)大家の息子とは、よく話すよ。
低い自己肯定感： 他者との関係を築けな かった背景	教育背景や思うように人づき あいができる自分に自信が 持てず、人の目が気になり家族 や周りとの関係を避けてきた	<ul style="list-style-type: none"> ・向こう(施設)に行けばさ、みんな笑われてると思ってさ。だから、寒氣するわけよ。だから、行けないわけ。 ・うちら(自分たちは)教育はされてないからさ、ほとんど、義務教育。学校行つてないから私。親が無学だからね。

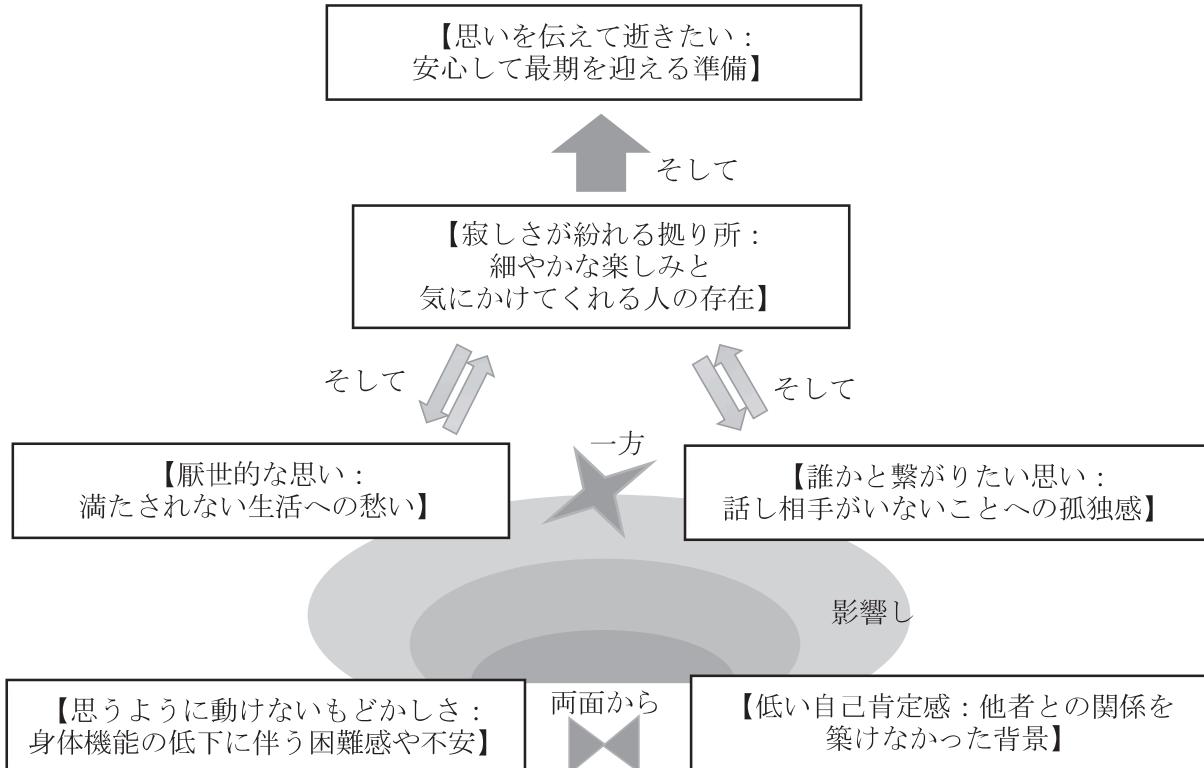


図2. 沖縄県北部地域で地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が語る死生観の構造

てさ。そのまま気絶しているわけよ。だから（後遺症は）これ（足）よ。これ（口）も動かしにくいくよ。」と語っている。また、現在の日常生活に関して「あそこ（2～3m離れた台所）に行って帰ってくるわけ。あっちまで行くのも、すごい時間かかるの。」とも語っており、脳梗塞の後遺症に伴い自宅内の近距離の移動などの日常生活動作に困難さを感じていた。さらに、「これ（シャワーチェア）も危ないよ。こんなふうに、ひっくり返ってさ。だから、誰かおればさ、安心して（シャワー）浴びるけどね。」と語つており、身体機能の低下に伴う日常生活への不安を抱えていた。

(2) 【低い自己肯定感：他者との関係を築けなかった背景】

最終ラベルは、[教育背景や思うように人づきあいができる自分に自信が持てず、人の目が気になり家族や周りとの関係を避けてきた]とした。

「うちら（自分たち）は、教育はされてないからさ、ほとんど、義務教育。学校行ってないから私。親が無学だからね。」とA氏は、自身の教育背景を引け目に感じていた。また、「向こう（施設）に行けばさ、みんな笑われてると思ってさ。だから、寒氣するわけよ。だから、行けないわけ。」と語つており、周囲の人の目が気になることからデイサービ

スや地域の活動などに参加せず、周囲の人と関わることを自ら控えていた。

2) 沖縄県北部地域で地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者が語る死生観

(1) 【厭世的な思い：満たされない生活への愁い】

最終ラベルは、[眠れないほどの空腹感や、生活していくことの大変さを考えると、もう死んだ方がいいと思ったりする]とした。

A氏は、「腹減ってさ、寝れんわけよ。夜は（配食の量が）少ないもんだから。」、「(今後の生活について)もう大変ね。もう、死んだほうが良いなって思うことあるよ、何回も。食べるものが無いさ。腹が減ってね、寝れないわけよ。」と語っており、満たすことができない空腹の影響から現在の生活を悲観し、厭世的な思いを抱えていた。

(2) 【誰かと繋がりたい思い：話し相手がいないことへの孤独感】

最終ラベルは、[話し相手もなく、楽しみのない毎日に自分がおかしくなりそうで、怖くてお酒で気を紛らわせている]とした。

A氏は、「楽しみはないね、何も。若い頃は三線やってたんだけどね。」と語っており、現在の生活における楽しみが欠如していた。また、「誰も喋る

人いないでしょ。だから、何もしないことが、おかしくなる。恐れている。」、「誰も来ないさ。だから鬱憤がたまるわけよ。そうなると、すぐに（酒）飲んで。」と語っており、来客がいないことや話し相手がいないことによる孤独感を表出していた。

(3) 【寂しさが紛れる拠り所：細やかな楽しみと気にかけてくれる人の存在】

最終ラベルは、【一人暮らしになってから、ラジオから流れる民謡や近所で気にかけてくれる人がいてくれることで助けられている】とした。

「このラジオよ、助かった。子守唄みたいな感じでね。何かやってればもう、安心してね、あの演歌とか好きなもんだから、あの一民謡とかね。」と語っており、一人暮らしにおける寂しさをラジオから流れる民謡など好きな音楽で紛らわせていた。また、「大家さんの息子さんよ、あれが毎日来るんですよ。雨降るときも来て、あんな台風の前にも来る。

『なんでこんなするかー』って言ったら、『あんたが、ここで亡くなったら大変だよ』って。『あんたがここでそのまま、眠ってるのあぶないよ』って。来るんですよ。」と身近に気にかけてくれる人がいることを語っていた。

(4) 【思いを伝えて逝きたい：安心して最期を迎える準備】

最終ラベルは、【信頼できる相手になら自分の今後について話して逝きたいと思っている。そうすれば胸のつかえがとれて安心できる】とした。

A氏は、「(不安に感じることは) 一人で、そのまま、逝くんじゃないかと思ってよ。何か眠ってて、そのまま逝くでしょ。(逝くって) 言ってくれればいいけど。」、「そのまま寝るんだったら、誰かに一言いって逝きたい。何か言えればいいけど。」、「その話（もし倒れたら、どうしようという話も含めて、生活する中で心配なこと、不安なことについて）大家の息子とは、よく話すよ。」と語っていた。A氏は、最期を迎える前に自身が抱える不安などを話せるような信頼できる人に一言伝えてから逝きたいという思いを抱えていた。また、「(自身の生や死について、語ったことについて) なんかスッキリしてね。安心してる。つかえてたのが、みんな出たような感じがしてさ、話してるだけでもね、最高にいいですよ。」と語っており、自身の生や死に関して他者と話すことができたことで、胸のつかえが取れ安心感につながっていた。

V. 考察

本研究の結果から、A氏の死生観は、【思うように動けないもどかしさ】や、【低い自己肯定感】を根底に【厭世的な思い】と、【誰かと繋がりたい思い】の間で逡巡しながらも、【寂しさが紛れる拠り所】を見出すことで、最期に【思いを伝えて逝きたい】として語られた。

先行研究では、高齢者が一人暮らしとなる背景として、配偶者との死別や離別（福島,2013）などの存在が明らかとなっており、親族や近所の人と疎遠状態にあることなどA氏の一人暮らしの背景と同様の結果となっている。また、Arslantaşら（2015）は、65歳上の高齢者を対象とした研究において、慢性疾患を抱えていることは、不十分なセルフケアや疼痛、社会生活の制限などの問題をもたらすと述べている。さらに、高齢者の場合は、身体的または社会的に経験される制限によって、これらの状況に対処することが困難となり孤独を感じる可能性を指摘しており、A氏が語った状況と類似している。A氏はこれまでに重大事故にあう経験や、家で転倒して動けなくなったことなどが、A氏の孤独感に影響していると言える。松田、永田、新城（2019）によると、最終学歴が低いほど「1回/週以上の外出はあるが、昨年より外出頻度が減少している」閉じこもり予備軍の高齢者割合が高くなると報告している。A氏も学歴への引け目を感じ、思うように人づきあいができない自分に自信を持てず、人の目が気になり家族や周りとの関係を避けってきた背景がある。これらのことから、疾患の影響によりセルフケアや日常生活に困難さを抱え、さらに親族や近所の人とのつながりを持たないA氏にとって、孤立死は身近な問題であることが推察される。このような中で、A氏はラジオから流れる民謡など、生活の中に細やかな楽しみがあることや、大家の息子さんなど、気にかけてくれる人の存在を意識することで、【寂しさが紛れる拠り所】を見出すことに繋がったと考える。

本研究に際し研究者は、孤立死は悲しい死であり、孤立死のリスクが高いと推測される地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者の死生観においては、特に孤立死への不安が強く語られる予測していた。一般的に孤立死は予防すべき死であると考えられている（大曾根, 2016；田中、森實, 2016；川口、高尾, 2013）。しかし、A氏は孤立死のような死を迎える可能性についても自覚し、そのうえで【思いを伝えて逝きたい】という心情が語られた。

高齢者が自身の「死」を話題にすることに関して、越智（2015）は高齢者は身近な人の死を多く経験する年代であるため、自己消滅につながる自身の死をイメージすることによる苦痛を伴う可能性を指摘している。一方で、吉田（2010）は、調査項目に「死」という言葉を用いた

研究において、約1,000名の高齢者からの回答を得られた（回答率80.3%）ことから、「死」に関する話題をタブー視する考えは、「超高齢社会への突入、介護保険制度の普及などによる時代の変遷とともに変化」していると述べている。A氏は、自身の生や死について語ることを肯定的に捉えていた。A氏はすでに両親を亡くし、さらに関係性が良かった兄を亡くした経験があった。現在、沖縄県内に弟1名、息子2名いるが、弟とは疎遠状態であり、2名の息子とは顔を合わせるたびに喧嘩になると語っていた。A氏が死生観を語ることに抵抗感がなかった理由としては、本研究を通して自分が抱える生や死に関する不安を表出することで、不安の軽減を実感していたことが影響していたと考える。また、A氏は、親族との関係も疎遠であり、自身の生や死に関して普段から語られる状況ないことや、周囲とのつながりも限定的であり、語る機会も少ないことが推察される。A氏のように地域活動に参加していない一人暮らし高齢者は、地域活動に参加し地域との繋がりを維持している高齢者と比べ、家族や地域とのつながりが希薄であり語る機会は少ないと、語りたい思いを抱えていると考えられる。さらに、福島（2013）は孤独死の不安を抱える一人暮らし高齢者を対象とした研究において、「何かあったときに相談できる人が身近な距離にいるということが生活するうえでの安心感をもたらし、孤独死の不安を軽減させている」と述べている。これは、地域活動に参加していない一人暮らし高齢者が伝えたい思いを語れる場と、高齢者の思いを引き受けてくれる繋がりの重要性を示唆するものと言える。

「語り」とは、自己を表出させる行為であり、語りを通してこれまでの自己の経験の振り返りが促される（阪本, 2005）。また、高齢者は「人生の終わりを意識したとき、『これだけは残したい』『何かを伝えたい』『自分の人生の意味を見つけたい』という気持ちが高められる」ことが明らかになっている（やまだ, 2008）。A氏は、本研究への協力をうながす中で、語ることを通してこれまでの自身の人生を振り返り、さらには最期の時のことを考える機会となったことで、最期に【思いを伝えて逝きたい】という心情の表出につながったと考える。さらに、これまでの人生の中で抱えていた思いや経験などを踏まえ死生観を語ったことで、一人で考えていたことを他者に聴いてもらえ精神的に楽になり、安心感につながると考える。またA氏の場合、自らつながりを断っていることから、関係作りが困難な状況が推察される。田中、長谷川（2014）によると「高齢者が安心して自己の生や知、すなわち魂を託すことのできる環境が重要である」と述べている。地域活動に参加していない一人暮らし高齢者が最期に伝えたい思いを語れる場と、聴く人の存在とつながりを支援することの重要性が示唆された。

VI. 結論

地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者A氏は、現在の生活への【厭世的な思い】と、今後の人生における【誰かと繋がりたい思い】の願いの間を逡巡しながらも、【寂しさが紛れる拠り所】を基に、自身の最期を意識し【思いを伝えて逝きたい】という死生観を抱いていることが明らかとなった。

地域活動に参加していない一人暮らし高齢者が安心して最期を迎える準備として、伝えたい思いを語れる場や、聴く人の存在とつながりを支援することの重要性が示唆された。

VII. 研究の限界と課題

本研究では、沖縄県北部地域で地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者1事例の語りから得られた結果であり、一般化は困難である。今後も継続してデータの収集・分析を行い、沖縄県北部地域で地域活動に参加していない一人暮らし男性高齢者の死生観を明らかにしていくことが今後の課題である。

謝辞

本研究にご協力いただいたA氏および、沖縄県北部地域の社会福祉協議会担当者に心より感謝する。

なお、本研究は平成31年度環太平洋地域文化研究所新規採用者助成を受けて実施した。

引用文献

- ArslantaŞ, Hülya., Adana, Filiz., Abacıgil Ergin, Filiz., Kayar, Derya., Acar, Gülcin(2015):Loneliness in Elderly People, Associated Factors and Its Correlation with Quality of Life: A Field Study from Western Turkey, Iran J Public Health, 44(1), 43-50
福島忍（2013）：都営住宅における孤独死の不安を抱える一人暮らし高齢者の特性，日本の地域福祉，26, 1-9
平井寛，近藤克則，市田行信，末盛慶（2005）：高齢者の「閉じこもり」，日本の高齢者—介護予防に向けた社会疫学的大規模調査，公衆衛生，69(6), 485-489
菅野久美子（2017）：孤独死大国 予備軍1000万人時代のリアル，双葉社，252-255
川口一美，高尾公矢（2013）：団地における孤独死の発生と防止対策に関する考察—千葉県八千代市A団地の事例を手がかりとして—，聖徳大学研究紀要，(24), 17-24

- 河村諒, 中里和弘 (2016) : 近親者と死別した高齢者の悲嘆に関する死生観についての検討, ホスピスと在宅ケア, 24(1), 24-37
- 厚生労働省 (2008) : 高齢者等が一人でも安心して暮らせるコミュニティづくり推進会議(「孤立死ゼロ」を目指して) —報告書—, 2019年1月17日入手,
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisaku-houdou/2008/03/dl/h0328-8a.pdf>
- 松田めぐみ, 永田美和子, 新城慈 (2019) : 沖縄県過疎地域に暮らす高齢者の「閉じこもり予備軍」の状況とその関連する要因, 名桜大学紀要, (24), 13-21
- 溝口広紀, 大城凌子 (2019) : 一人暮らし高齢者が抱くエンドオブライフの思いに関する文献検討, 名桜大学紀要, (24), 93-103
- 内閣府 (2019) : 令和元年版高齢社会白書, 2020年2月25日入手,
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2019/html/zenbun/s1_1_1.html
- 内閣府 (2021) : 令和3年版高齢社会白書, 2021年10月20日入手,
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2021/zenbun/03pdf_index.html
- 越智裕子(2015):高齢者の死生観に関する研究:「死生観」と「スピリチュアリティ」と「幸福な老い」との関連を中心, 聖学院大学総合研究所Newsletter, 24(3), 22-27
- 阪本陽子(2005):高齢期の社会化における「語り」の意義, 教育研究所紀要, (14), 73-78
- 菅原普 (2018) : 孤独死, 推計2.7万人つかめぬ実態「国に定義なく」, 2019年1月21日入手, <https://www.asahi.com/articles/ASL5X55P8L5XTIPE026.html>
- 田中博子, 森實詩乃 (2016) : 団地自治会による高齢者の孤独死予防の取り組みに関する一考察, 日本地域看護学会誌, 19(1), 48-54
- 田中浩二, 長谷川雅美 (2014) : 高齢者のうつ病からの回復—生活世界との関連における検討—, 日本看護化学会誌, 34, 1-10
- 上田智子, 上原英正, 加藤佳子, ほか (2010):孤独死(孤立死)の定義と関連する要因の検証及び思想的考究と今後の課題, 名古屋経営短期大学紀要, (51), 109-131
- 梅田正覚 (2019) : 沖縄の孤独死の実態 3年で431人, 平均59歳, 8割男性飲酒が原因多く, 2019年7月9日入手, <https://ryukyushimpo.jp/news/entry-881275.html>
- 山田護 (2019) : 高齢化・過疎地域における地域医療, 九州ブロック地域医療交流会in熊本, 沖縄保険医新聞, 4
- やまだようこ (2008) : 老年期にライフストーリーを語る意味, 老年看護学, 12(2), 10-15
- 山浦晴夫 (2012) : 質的統合法入門考え方と手順, 23-78
- 矢野香代, 近森由江, 広瀬美映, ほか (2008) : 高齢男性の社会参加要因, 川崎医療福祉学会誌, 17(2), 437-448
- 吉田千鶴子 (2010) : 高齢者が考えるエンドオブライフ期の迎え方—エンドオブライフ期への支援システム構築をめざして—, 豊橋創造大学紀要, (14), 96-110